0938

國際輿論を通して觀る
皇國日本の立場

昭和九年三月五日
陸軍省軍事調査部編

アジア歴史資料センター

0939

目次

前書	一頁
日蘇戰爭の勝敗の豫測	一
日本は自殺するか	四
黃禍は幻想にあらず	八
黃禍論に對する評論	一〇
日米關係	一一
日英關係	一七
海軍比率問題	一九
日蘇關係	二一
廣田外相演說の拔萃	二九

アジア歴史資料センター

0940

廣田外相演說の反響……三六
英國の部……三六
米國の部……三八
獨逸の部……四八
佛國の部……五四
小國の部……五七
支那の部……六四
陸相更迭反響……六五
滿洲國帝制實施に就て……六六
求め難き世界の平和……七二

アジア歴史資料センター

09441

前言

太平洋時代の世界軸心に立つ皇國日本の前途は誠に多事多難である。國民は國際圏内に於ける祖國の立場を正しく認識して、其の認識の基礎の上に、皇國の國歩を力強く進めて行く覺悟が必要である。

現下に於ける世界の輿論は、其の悉くが必ずしも日本の立場を正しく理解して居るとは限らないが、亦以て吾々の參考とするに足るものがある。茲に最近に於ける國際輿論を拔萃篇錄する。

アジア歴史資料センター

國際輿論を通して觀る皇國日本の立場

日蘇戰爭の勝敗の豫測

（一九三二年十一月二十二日發行獨逸國防雜誌所載
ハンス・ワグネル所論摘譯）

「諸新聞の報道は極東に於ける情勢が日に月に尖鋭化して行くことを明示する、而して日蘇兩國が常に開戰準備を怠らないことは正當な事である、余は曩に「蘇國は果して戰爭を避くるを要するや」なる一文（獨逸國防雜誌一九三三年十月二十五日號）に於て、純然たる威力政策遂行の可能なること及日蘇兩國間に於ける戰爭勃發の可能性を明にし且つ新情勢に基き蘇國が勝利を博するものと觀るのは全く不當にあらざることを述べて置いたが、今や米國の蘇聯承認說も目立つて積極的となり、此の結果交涉が成立したならば日本に對する蘇國の地位は更に鞏固となることは疑を容れない」。

アジア歴史資料センター

「蘇軍參謀總長イエゴロッフはハバロフスクに於ける最近の軍事委員會に於て、波蘭及羅馬尼方面からは何等危險が來る虞れはない。それがため蘇國は莫大なる兵力を滿洲に派遣しても何等危險を醸すが如きことはないと言明した」。

「日本は戰時に於ては縱令尙ほ若干の補充師團を創設することを企圖しても、蘇國に比すれば著しく不利なる情況にある」。

「極めて重要なる問題は軍隊の技術的裝備の問題であることは論を俟たない。蘇軍が著々又多方面に亙つて從來此の點に力を注いで居たこと及其空軍、技術及化學部隊(瓦斯)を絕えず促進し、完成を急いで居るといふことは周知の事實である。而して一朝有事の日に於ては恐らく尙幾多の意想外なることに遭遇して驚くであらう。」「之に反して日本軍は僅かに少數の特殊部隊を有するに過ぎず、最近に至つて漸く若干の特殊兵器を軍に採用するに至つた樣な狀況である」。

「蘇國の狀態は威力政策的見地から見るも、將又純軍事的立場から觀察するも決して日

0943

アジア歴史資料センター

本に對して不利なものとは云へないと結論し得べく蘇國の優勢なることは事實上否定し得ないであらう。從つて蘇國が今回此優勢なる力を實際に行使し得るといふことも亦期待されるのである」。

「而して日本は亞細亞大陸から驅逐せられてはならないと云ふこと又亞細亞大陸は日本にとつては申す迄もなく生命線であるといふことを頗る良く辨へて居る。之に反して蘇國は太平洋岸に保障せられ、脅威せられざる地位を得ることを要し、而して尙ほ莫斯科に於ては「世界革命の展開」論も尙ほ未だ忘れられて居ないのである。折も折最近莫斯科共產黨社會に於ては戰爭禮讃者の數が增加し又スターリンは既に不決斷及小心なりとの非難を受けて居る。斯かる戰爭氣分が既に蘇國に於て如何に促進されて居るかと云ふことはヴオロシロツフが其極東檢閱旅行の際述べたる「吾人は一時間と雖も否分時と雖も戰爭に對する準備を整へて居なければならない時機が來た」との言に鑑みるも最も明瞭に現はれて居る」。而して日本も亦左程聲を大にはしないが、恐らくもつと勃强に同樣

アジア歴史資料センター

な決意を示して居るから極東戰なるものが悲慘なる最後の決著を見る迄徹底的に戰はれ而して其結果は、兎に角世界歷史を作るであらうと云ふことは覺悟しなければならないのである。而して其結果はどうであらうとも、即ち勝たうと敗けやうと兎に角蘇國は歐洲に於ても亦新情勢を展開せしめ、又紛糾をも惹起せしむるであらうと推察せしめらるゝのである」。

日本は自殺するか

アメリカの週刊雜誌「リバーティ」誌十一月號所載

レオ・トロツキー所論

「世界大戰このかた世界における人文史上の一番大きな悲劇は、かつて帝政ロシアが落ちたのと同樣な深淵に、日本が飛び込まふとしてゐることだ」。

「日本の政治家は、日本に革命の危險などはないと樂觀してゐるが、事實において戰爭と革命との二つの脅威に對して、政治的にもまた經濟的にも堪へゆく力は實際上ないの

0945

アジア歷史資料センター

0946

だ」。

「日本はいま噴火山上にある。この火山が一度爆發すれば、日本の野心も木葉微塵にとばされるだらう。」

「日本の支配階級は昔から自惚れが少し強すぎる」。

「おまけに日本の工業は輕工業である。機織業關係の勞働者が勞働者總數の五十一パーセントを占め、重工業に從事する勞働者は十九パーセントにしか過ぎぬ。アメリカ國民は毎年一人當り五百七十二ポンドの鋼鐵を消費し、ヨーロッパ諸國は二百四十五ポンド、ソヴエート聯邦は七十七ポンドであるが、日本人一人當りの鋼鐵消費量は僅か六十三ポンドにも達しない有樣だ」。

「近代戰爭は金屬戰だ。滿洲を得た日本の工業力は前途大いに伸展の見込みがあるが、見込みが實現するためには巨額の資本と長い時日とを要する。しかし日本の現狀はその何れにも頼ることが出來ない。論據は現在の事實とこゝ數年間に根本的改革の出來ない

アジア歴史資料センター

事實から出發すべきである」。

「日本國民大衆の健康は非常に惡い」。

「農村は壓迫によつてドン底に喘ぎ、工業といへば主として機織業で女工と少年工が大半を占めてゐる。その何れも近代的軍事技術の水準に達し得る兵士を供給することが出來ないのだ」。

「太平洋の平和を確立するためには、一つの手段として日本の神話的な自惚れを裸にせねばならないのだ。日本無敵といふ神話で全世界は嗜眠狀態に陷つてゐる。かゝる神話は平和確保のため打破しなければならないのである」。

「日本の改造時代はロシアの國政改革、アメリカの南北戰爭直後の一八六八年に始つてゐるが、この改造は支配階級の自己保存本能の反射作用にしかすぎず、中產階級の奮起ではなかつた。微溫的な改造によつて中產階級の奮起をまるめやうとする官僚的企圖にすぎないものであつた」。

アジア歴史資料センター

0948

「もし日本が商工業並に軍の構成上、全然臺灣、朝鮮、滿洲に依存せずにすめば、日本諸島で政治的に統一されてゐる事實は便宜であらう。しかし滿洲も入れると、日本國内には六千五百萬の日本人に對して約五千萬の異端者が存在することになる。彼等は政治的變革の火藥庫で戰時には特に危險であらう」。

「小作農のストライキ、農民が勞働者と協力せんとする傾向、更に知識階級も不滿の聲を洩らしてゐる。しかもこの階級から官公吏、上級軍人が出るのだ、すべての學校には非合法祕密結社の支部が設けられてゐる。中產階級は軍部に依存せるにもかゝはらず、軍閥の權力を厭忌してゐる。軍部の首腦は資本家たちと睨み合つてゐる。萬人がすべて他人に不滿を抱いてゐるのだ」。

「日本はいま斷崖にたつてゐる。日本は假裝敵國としてゐる、ロシアまたはアメリカに比して經濟的に貧弱である。日本の工業力は數年間の戰爭に數百萬の武器彈藥を供給する保障が出來ない。またその能力に缺げてゐる」。

アジア歴史資料センター

「日本の經濟組織は平時においてすら十分の軍隊を支へるべく荷が重すぎてゐる」。

「最後に自分は、日本並にロシア人相互の利益のため、かつは文明全般のために、日本の帝國主義者が戰爭といふ大きな賭け事を試みないやう切望するのである」。

黃禍は幻想にあらず

イタリー首相、ムッソリーニ

（一月十四日桑港エキザミナー紙所載）

「いまやヨーロッパ文明の壞滅を救はんと欲せば、再び東西文明の融合を普遍的となすより外にないのである」。

「由來日本は多產的國民にして、かつ好戰的精神をもち輿論の重壓を感じない國民である。しかして日本の現在は危險なる帝國主義時代である」。

「しかも近來日本は產業上にまた文明の上において異狀なる發達を遂げ西洋諸國を凌駕せんとし、それをうらやむところなきまでに發達してゐる」。

アジア歴史資料センター

「支那はいまだ日本の武力的好餌たらんとしてゐる。が、しかし支那は將來において強力なるかつ統一ある國家となるべく、太平洋の運命は實に今後百年間の支那の進展にかゝつてゐる」。

「即ち白色文明の極東制覇、並に太平洋の運命は今後百年間における支那の開展によつて定まるだらうと思考されるのである」。

「けれども日支關係が將來において現在の如く對立狀態を持續することは考へられない。もし日支の融合一致を假定するならば、それが反歐的、反米的ならざるを誰が保證するのであらう。日本だけの發達によつてさへ現在の如く西歐に脅威を與へてゐるではないか」。

「いまだ更の黃禍論は時代錯誤の感なきにあらざるも、日本の經濟的進出は、あながち黃禍の幻想にあらざるを證するものである」。

「故に黃禍を單なる幻想に終らしめんためには、白人西歐諸國の政治的協力にまたねば

アジア歴史資料センター

ならぬ。かくして自らの牙城を守らねばならぬのである」。

ムッソリニーの黄禍論に對する評論

一、米國

ワールド・テレグラム紙上 Tracy の論評（一月二十日）

米國が蘇聯邦に加擔すべしとするは、米國人の心理を知らざる爲にして、米國民は外國間の戰爭に捲込まるゝに先ち、必ずバランス・オブ・シートを研究すべく、戰債支拂はれず戰爭の目的達せられざりし事實のみにても、米國を外國間の戰爭より遠からしむるに充分なり。

二、佛國

「タン」羅馬特信（五日）

「近來「ム」首相が日本の進出に言及し、東西文明の調和融合を唱へ居る眞意は、要するに之に依り伊國のプレスティージを增し、將來太平洋問題解決の場合の發言權を

アジア歴史資料センター

0952

得、支那乃至極東に於ける歐米諸國の地位改訂に付論議を見る場合、除外せられざる樣釘を打ち置かんとするものにて、之れ日本に反對し蘇、米、支の立場を支持する事ある所以なり」。

日米關係

一 紐育デーリー・ニュース(一月十五日)

「Spengler の言ふが如く、事實日本は歐米諸國が萎縮しつゝある時、獨り其の國力を急激に增加しつゝあり。惟ふに吾人の文明は沒落の過程にあらんも、吾人は適當なる方法を講じて沒落の速度を緩め、日本人が最終的に吾人を負かすべき時期を延長し得べく其の方法は巨大なる海軍を作るにあり。此の用意を怠らんか、西歐文明は急激なる沒落を見る可し」。

二 紐育イーヴニング・ポスト(一月二十三日)

「戰爭の危險增大し居る今日、新聞の態度は特に愼重なるべきに拘らず、パースト系諸新

アジア歴史資料センター

聞が口に平和を唱へ乍ら、日本軍人の言を誇大に報道し、日米兩國民をして恐怖心を抱かしめ、恰も大戰直前の軍需品製造者の宣傳と同樣戰爭の危險を增大しつゝあるは奇怪なり、吾人は最早軍國主義者同樣平和主義者の宣傳に對しても沈默を守る能はず」。

三　ブレークスリー教授の演說要旨

ボストン・トランスクリプトの報ずる所に依れば、Blakeslee 教授は一月二十日ボストンに於けるフォーレン・ポリシー・アツソシエーションの會合に於て、左の趣旨の演說を爲したる趣なり。

「日米間の根本問題は、日本の亞細亞モンロー主義の主張に係るものなるも、米國竝列强は日本が支那の後見役たることを正當と認めず、米國政府も米國人も對日戰爭の如きは全然考へ居らざるを以て、若し日米戰爭ありとせは、日本側より始めざる可からず。然し乍ら、日本は日米戰爭に勝利を獲たる際獲得することあるべき戰利品の大部分を、現在既に獲得し居れり、即ち日本は滿洲を有す。米國及列强は日本

0953

アジア歴史資料センター

の滿洲に對する權利を認めざる旨聲明せるも、實力を以て日本を滿洲より追はんとするもの無し、斯かる事態の下に於て、對米戰爭開始は日本に取り一大惡策と謂はざる可からず、日米間現下の戰雲は近く消滅すべきも、只注意すべきは、日米間何等戰爭の危險無きに拘らず、日本の一部に於て米國に對し不幸なる態度を採り居ることなり」。

四　米蘇復交と對日關係

羅府ポスト・レコード（一月二十二日）

「米國が蘇聯邦を承認して以來、世界政治上重大なる變動の起りつゝあること次第に明かとなり來れり」。

「今や日本が極東に於て米蘇兩國を假想敵として現れ來り、而して歐洲の或國々が之を喜び居るは事實なり。兎も角、米蘇復交に依り、米國は現下の事態に對し最も有效なる處置を執りたりと言ふべく、尠くも之に依り世界の他の部分に於ける緊張を緩和

アジア歴史資料センター

せしひるの力有る事疑無し」。

五　日蘇戰爭と米國

桑港クロニクル特別社説（一月二十六日）

「現在の事態に於ては言論は危險なる爆發物に等しく、輕々に之を弄ぶべきに非ず」。

「日蘇相戰ふが如きは吾人の好まざる所にして、日支事件と同樣極力之が防止に努むべきも、一旦爆發せば吾人は其の圏外に立つべきなり」。

六　ハーストの對日態度

羅府タイムス（二月四日）

「ハーストが毎日同系新聞紙上に於て排日的言動を弄し、戰爭を齎さんと努め居る下劣なる態度は、西米戰爭の夫れを思はしむ。ハーストの言動が米國に於て全然信用なきは何人も知る所なるも、日米關係に害を及ぼす彼の能力は、誠に偉大にして且危險なり。

0955

アジア歴史資料センター

0956

日米兩國は今や岐路に立てり。現下の緊張せる危險なる感情は、隔意なき友情に依りて緩和し得べく、又一方人類歴史上最も怖るべき戰爭に迄煽り立つる事も可能なり。日米間には何等の敵視すべき理由無く、其の通商關係の緊密なるは論を俟たざる處、今や太平洋上新たなる世界出現しつゝあり。此の世界は米國、加奈陀間の夫れの如く、安全且親密なる樂園たる事を得べく、又中部歐羅巴の夫れの如く、疑惑と危險の地獄たる事をも得べし」。

七　フイッシュのブリット駐蘇大使評

二月二日下院本會議に於て在ソヴイエト聯邦米國公館關係豫算が話題に上りたる際、從來承認反對を標榜しブリットの駐蘇大使任命にも一時異論を唱へたる紐育州選出共和黨議員フイッシュは、右豫算の計上に贊意を表したる後左の通述べ居れり。

「余は從來ボルシェヴイキ政府と交渉を有せるブリットの經歴に鑑み、其の駐蘇大使任命に若干疑惑を抱きたる者なるが、最近長時間に亙り親しく膝を交へ會談した

アジア歴史資料センター

る結果、彼は蘇聯邦の國情に通じ、莫斯科に於ける米國代表として充分の資格を備へ居るのみならず、特に日蘇間に紛議發生の場合、良く米國の利益を確保すべきを信ずるに至り且如何なる紛爭を發生するも米國政府としては我關せずの態度を持し、其の禍中に捲込まるゝを欲せざる事を蘇政府へ申渡し得る人物たるを必要とする處、余は彼が蘇政府に對し、米國は日本と戰ひ何等得る所無く、日蘇間に戰爭勃發の場合は中立を守るべき事を宣明す可きを疑はず」。

八　アメリカ下院共和黨議員マツク・フアツレン氏下院に於ける演說（二月二十六日）

イギリスは日米戰爭を念頭に描いて辛抱强くこれを持つこと久しかつたのみならずこれを促進するやうな宣傳さへ計つて居るやうである。何となれば日米兩國はイギリスにとつては通商上に於ても海軍力の優越に於ても共に强敵なのであるからである。余の知る限りに於てさへ澤山なイギリス人やイギリスの團體がかゝる戰爭を實現させるやうに愼重に周到な考慮をもつて努力しつゝある。

アジア歴史資料センター

0958

現にアメリカ國内に於てまでかゝる運動をやつて居る有様である。勿論かゝる干渉は日米國民の共に欲して居ないものである。しかし此の運動こそ國際政局の將棋盤の上で動いて居る一つの力なのである」。

日英關係

一　ロンドン・タイムス（一月二十五日）

「貿易戰爭の危險を冒しつゝ日本との通商條約を廢棄して何の利益ありや。其の結果の重大なるは何人も考へ得る所なり。更に英國外務省の單なる要求に依り、世界が其の市場を日本の商品に對し閉鎖すべしと考へ得るや、說を爲す者或は英帝國として救濟の法を採るべしと言はんも、英帝國としては既に爲すべきことを爲し盡したり。日本の競爭に對抗する此の上の手段は、自治領が其の必要を認めたる場合、自らの發意に依り行はるべきのみ、英本國の綿製品は自治領に於て既に充分の特惠を享有し居るのみならず、最近印度の如きは英製品に對し、二十五パーセントの特惠を認めたるのみ

アジア歴史資料センター

ならず、自ら日本よりの輸入量を制限するに至れり」。

「日本の貿易競爭が爲替の下落に依るものとして、此の點を過大視する傾あるも、日本の產業成功の原因は、或程度迄其の生產及分配方法の能率の優秀なる點に存す。然るに今日迄ランカシャは此の教訓を充分に認識せざりし次第なり」。

二　マンチエスター・ガーディアン（一月二十五日）

「日本の貿易競爭問題に付ては、商相の立場は一層簡單なり。即ち同相は、事態重大にして何等かの措置を必要とすとの意見に和し、更に今後の手段は寧ろ主として產業方面より出づべきものなりと述ぶる事を得べし」。

三　新嘉坡防備問題

紐育ヘラルド・トリビユーン（一月二十三日）

「東方亞細亞の戰爭の噂に加ふるに、新嘉坡の英海軍根據地に關する噂を生じたるは不幸なるが、同地の英海軍根據地は全く防禦的にして、英國としては極東に於ける

アジア歴史資料センター

戰爭の場合印度及濠洲を防禦するに必要のものにして英帝國のみならず和蘭に取りても死活の分るゝ問題なり。殊に米國が比律賓を放棄すとせば、英國に取りても新嘉坡の價値は一層增大す可し」。

「然れども日本海軍と雖、英國が新嘉坡を强く防禦し居る限り、南方經略を計るが如き事は爲さゞる可し。故に軍略上同港の海軍根據地を强大にする事は、太平洋に於ける現狀維持の保障となる可し」。

海軍比率問題

米國ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙ウオーター・リップマンの論說（一月二十三日）

「極東事情に精通せる米國人は、日本最近の宣傳の直接の目的が其の尨大なる軍事豫算案の名分を立つるにあるを見拔き居れるが、右宣傳は日本の輿論を誤り、國民をして不能を企圖せしめ、遂には國家の榮譽にも拘はるが如き拔差ならぬ難局に引入るゝ惧

アジア歴史資料センター

あり。而して右宣傳は日本の亞細亞進出に對する他國の容喙排除、及來るべき軍縮會議に於ける英、米との均等比率の要求の二個の原則を樹立せんとするものゝ如くなる處、右原則にして承認せられんか、華府會議に於て成立せる條約關係の基礎は全く破壞せらるべし」。

「日本にして海軍平等の主張に加へ、亞細亞に於ける自由行動の原則を飽く迄固執せんとするに於ては、結局海軍條約は消滅すべく、軍縮會議は召集の價値を失ふものなる事を率直に容認するを要す。蓋し日本が海軍平等の要求を固執する限り、右會議の開催は單に融合し難き勢力の對立狀勢を一般に廣告し、又之を助長するに過ぎざるべく、却て世界平和に危險なればなり。右は米國のジンゴイスト又は職業的反日家の偏見にあらず、事態を冷靜公平に觀察する人士の等しく抱く觀察にして、彼等は日本の宣傳行爲が今にして阻止せらるゝに非ざれば日本は逃れ難き世界孤立の地位に陷るに至るべきを信じ居れり」。

1960

アジア歴史資料センター

0962

日蘇關係

蘇聯邦の部

一　蘇聯邦中央執行委員會會議（昭和八年十二月二十八日）に於ける蘇邦當局演說の要旨

1　モロトフ演說の要旨

「對日關係に付ては從來既に充分言ひ盡せるが如く、蘇聯邦は平和主義を以て進み、不侵略條約の提議、東支鐵道の賣却交渉開始、極東に於ける日本利權事業、其の他に對する總ての事務的問題に對する好意的態度等に依り、其の平和的態度を實證し居れり。然るにも拘らず、日本の一部言論機關、官邊、有力者等は、頻りに蘇聯邦側に侵略的意圖あるやの如き凡ゆる風說の揑造に從事し或はグー、ペー、ウーが滿洲國境を侵犯せりとか、或は莫斯科の手先が支那に於て反日活動を組織せり云々として連日虛報を傳へ居れり。這は要するに自己出先の反蘇運動を隱蔽せんとするものにして、自己の立場が益、孤立となりつゝあるを感じたる軍閥が、特に極東戰爭に

アジア歴史資料センター

反對なる蘇、米支が接近し、何等か提携を爲すならんと惧れ疑心暗鬼に陷り、或は自ら之を否定する等徒らに苦心慘憺せる傍、蘇聯邦の大々的國力伸長に恐れを爲し、「頻りに今が最も便利なる時なり」と呼び居れり」。

「之に對する蘇聯邦側の使命は、依然極東平和政策を基礎として對日關係の改善に從事し、同時に現に起り得べき凡ゆる紛爭問題に備ふるにあり。今や戰爭の危險は特に現實的なるものあり。本年獨日兩國は共に國際聯盟を脱退したり。而して獨逸は自己の國防を擴張せんが爲に、又日本は支那に於て干涉の自由を得んが爲之を爲せるものにて、結局聯盟は或る程度迄干涉國の行動の自由を容認せる形となれり」。

「之を要するに、假令反動派の侵略ありとも、吾人の平和事業は依然として進行すべく、以て對蘇侵略を防止すべく、蘇聯邦の勞農民衆は蘇聯邦を廻る斯る國際關係を篤と理解し、平和に危險なる事實並に吾人の平和的立場を鞏固ならしむべき事實に付了解を持つ事最も肝要なり。資本國は自己の身上を知らざるものにして、結局

アジア歴史資料センター

0964

彼等は却て自滅の破目に陥るべし」。

2　リトヴィノフ演説要旨

彼は冒頭に於て今やブルジョア平和主義の時代は過ぎ去れりと爲し、次で「軍事冒險のイデオロギーに二つあり。其の一は世界共産主義と戰ふ名義の下に、實は條約改訂、領土獲得の如き狹義の國民主義を實現せんとする某歐洲國の態度にして、他は更に一歩を進めたるものなるが、此の最後のものは準備も整ひ居り、複雜なるイデオロギー乃至論理の工作に依らず直に國境の變更を企て、而も外交官をして之を行はしめず將軍連をして行はしめ、此等將軍指導の下に幾多の軍隊は廣大なる亞細亞の大陸に於て有ゆる方面に亙り、何等の國境をも將又何の權利をも考慮すること無く自由に濶歩し居るものなり。尤も彼等と雖も或種のイデオロギーは之を有するが如く、時としては恰も共産主義に對して歐洲文明を擁護するが如く、又時として大亞細亞民族主義とも云ふべきが如き貧弱なるものなるか、何れにするも

アジア歴史資料センター

頗る民族的、侵略的帝國主義的の目的を包藏するものなり」。

對日關係に就ては

「今や吾人關心の焦點は、我對日關係にありと斷言するも過言ならざるべし。日本の政策は現時國際政局水平線上に於ける最も暗き妖雲と認むべく、從て蘇日關係は單に聯邦のみならず、全世界注視の的となり居れり」。

「事態は日本が滿洲に軍事行動を開始すると共に變化し來れり」

「我方が單なる防禦手段を講じつゝあるに對し、日本は周知の如く熱狂的に戰爭の準備を爲しつゝあり。而して何者も日本の安全を窺ひ居らざるを考ふれば、右は純然たる攻擊手段なりと云はざるべからず。勿論日本に於ては蘇聯邦の如き勢力に充ちたる巨人との戰爭が、日本にとり甚だ危險なることを知る識者及有力者に乏しからずして、彼等は陸海軍豫算の增加及最上の場合に於ても、效果の疑はしき軍事行動に對し數十億圓を消費するよりも鐵道の實際價値ある數億圓を吾人に支拂ふことの賢明なるを知

0965

アジア歴史資料センター

り居れり」。

二　紐育タイムス（昭和八年十二月二十八日）所載デユランティーに對するスターリンの會談要旨

「吾人は日本と親善關係を保持せんと欲するものなるも、蘇聯邦側一方のみにてはどうにもならざるは勿論なり。日本に一層合理的なる分子と、一層愼重なる意見が勢を得るに於ては、兩國の親善は保たれ得べきが、吾人は好戰的分派が穩健なる政策を押除けざるやを恐る。凡そ眞の危險存する場合、國家として之に應ずる用意を爲さざるを得ず、何となれば、政府にして外國より攻擊せらるゝ危險を豫見し、自衛の策を講せざれば國民の信任を失ふ可ければなり。因に日本として蘇聯邦を攻擊するは賢明に非ずと思はる。其の理は經濟狀態餘り健全ならず、朝鮮、滿洲及支那に弱點を有する而已ならず諸列强が斯かる行動を支持せざる可ければなり」。

三　難大會に於けるウオロシロフの報告演說（一月三十日）

アジア歴史資料センター

「日本は現在滿洲の主人公となり居れるが、其の誓約に反し東支鐵道の蘇側利益を壓迫し居れる處、是に對し吾人は漫然手を拱きて何等防禦策を施さざるが如き好意を持合せ居らず」。

「日本との戰爭は吾人にとり容易の業に非ずと雖も、日本若し開戰せんか戰爭は大規模のものとなるべく、之に加ふるに、右は現在のボリシェビキとの戰爭として、日本にとり頗る高價なるものとなるべし。而して日本側之を知り居り、開戰の場合には本式に準備して之に臨むなるべし」。

小國の部

一　瑞　西

ジュルナル・ド・ジュネーヴ（一月二十五日）

日蘇兩國關係は客秋以來益〻重大となり來れるが、福建事件は支那に於ける兩者抗爭の一表現なり。日本は浦潮、北樺太席捲の欲望を藏し、蘇聯邦亦之に對抗する爲哈府

アジア歴史資料センター

8960

を空軍根據地とし、日本の侵略を待て國民の支持の下に之と戰はんとしつゝあり。廣田外相は議會演說に於て蘇聯邦の非友誼的態度を難詰せるが、倫敦「タイムス」は之を以て事態緩和を目指せるものとなしたる處、右は英外務省の旨を受け、東京に對し愼み深く警告を爲したるものと見るべし。何れにせよ日本の企圖する所は明瞭にして、荒木陸相更迭するも政策變更は思も寄らず。新嘉坡海軍會議は英國の極東に對する警戒なり。要するに日本は成功疑無きにあらざれば行動は開始せざるべく、定めし春期となり蘇聯邦飢饉の惡化するを待ち居るものなるべし」。

二　羅馬尼

二十四日の Curentul

日清、日露兩戰役を經て今日に至る日滿關係を比較的正確に敍述したる後「日本が滿洲に於て爲し遂げたる事業は、之を列擧する丈けにても新聞紙の全面を要す可し」とし、「滿蒙帝國が第二の日本帝國たることは疑ひ無きも、日本には成算有り。歐洲及米

アジア歴史資料センター

國の脅迫に屈服するものに非ず」と論せり。

三、加奈陀

一、トロント・スター（一月十九日）

日、蘇、米、佛の責任ある政治家が互に無遠慮なる言説を吐露しつゝあるは、日蘇關係惡化の異常に深刻なるを思はしむ。蘇聯邦は兵備充實せざるを以て、此の際積極的行動を採らずと稱せられ、他方廣田外務大臣は寧ろ讓歩的なる對蘇平和工作に腐心し居る如くなるが、腰を低くして近寄る希臘人には用心すべしとの諺に洩れず日本の態度には油斷なり難し。」

二、シチイズン（一月二十四日）

米、佛、蘇當局が異口同音に日本を中心とする戰爭の危險を說くは偶然にあらず。各國は眞劍に萬一の場合を考慮しつゝあり而して蘇聯邦は、米蘇國交恢復後日本に對し決然たる態度を明にしつゝあるが、日本に取り一層恐るべき危險は、經濟競爭

アジア歴史資料センター

0460

「西洋諸國が日本を共同の敵とする空氣濃厚なる事之なり」。

三　ニユース・ヘラルド（一月六日）

嘗て日露戰爭に於て露國側の敗北せるは完全なる敗北にあらず。當時假に最後迄戰ひ果したる場合露國側が勝を制し、日本は其の乏き資源を使ひ果したる後慘めなる敗者となりたるやも知れざりしなり。日本に於て此の間の事情を知悉し居る事實は、恐らく此の二國間の將來の戰爭に對する最も良き保障なる可し。唯不幸なる事には日本が戰前の獨逸同樣不敵の軍隊を有すとの信念を有することにして、現在の處日本は蘇聯邦よりも寧ろ米國若は英國と戰ふの可能性あり。但し尙豫斷の時期にあらず」。

外務大臣廣田弘毅演說の拔萃

「幸に帝國と友好各國との關係は、聯盟脫退後に於きましても、外交上は勿論、通商貿易上も一層密接となりまして、親善を加へつゝあることは同慶の至りであります」。

アジア歴史資料センター

「滿洲國朝野の翹望する帝政問題も近く實現せられ、新興獨立國として國礎も愈〻固きを加ふるの運びに至らんとして居りますことは、獨り滿洲國の爲のみならず、東洋の平和、延いては世界平和の爲に慶賀に堪へぬ次第であります、吾人は今後共能く聖旨の在る所を奉體致しまして、官民相携へて同國發展の爲に極力寄與せねばならぬと考へて居るのであります」。

「次に帝國政府は東亞に於ける平和の維持に付き、重大なる責任を感じ且つ確固たる決意を有するものでありますが、是が爲には先づ支那自體の安定が最も肝要なりと思ふのであります、隨ひまして支那が速に其治安と繁榮とを回復しますことは、帝國政府の衷心より希望する所でありまして、兩國が常に善隣互助の關係を保ちまして、以て東亞の平和及發達に貢獻することは、當然の使命と謂はなければならぬのであります、然るに支那の政局を見ますと、未だ斯の如き希望を現實に現はすには遠ざかつて居るやうな次第でありますのは、誠に遺憾であります、近來に至りまして支那政府は其從前執り來

アジア歴史資料センター

09792

ました抗日政策の非なるを悟りまして、日支關係打開の方針を決定して居るやの情報もありますけれども、今日迄の所では、未だ右情報を裏書すべき具體的の事實は認め得ざる狀態であります、若し支那にして帝國の眞意を諒解し、誠意を現實に示して參りましたならば、帝國と致しましても之に順應して、十分好意的態度を以て之に報ゆるに吝ならざる次第であります、目下北支地方では、政務整理委員會の統制の下に、比較的平穩なる狀態を維持して居りますことは、誠に喜ばしいことであります、帝國政府と致しましては、滿洲國と同地方との接壤關係並に北支停戰協定維持の見地等に顧みまして其の治安維持につきましては特別の關心を持つて居るものでありまして苟も同地方の治安維持を亂すが如き事態の發現せざらんことを期待して居るのであります」。

「又同時に支那に於ける共產黨の活動及共產軍跳梁の狀況に付きましては、帝國政府としても深甚なる關心を以て注意を拂うて居る次第であります」。

「帝國と「ソ」聯邦との國交關係を顧みますに、大正十四年北京基本條約の成立以來、兩

アジア歴史資料センター

國は正常なる接觸を續けて來ました、滿洲事變發生に於きましても、善く相互の立場を諒解しまして、其間、難問題の發生を見なかつたのであります。然るに近來「ソ」聯邦の我國に對しまする態度には若干の變調を呈して居るやの觀があるのであります、「ソ」聯邦は頻りに新聞通信等に依りまして內外に向つて我國に對する非難の聲を放つて居ります、或は殊更事態の惡化を吹聽して其內治外交上に之を利用するやうな感がありますのは洵に意外に感じ、且つ遺憾とする次第であります」、由來帝國政府の「ソ」聯邦に對しまする公正なる態度と云ふものは、滿洲事變の以前と以後とを問はず、終始一貫して居るのでありまして、國體思想等に於きましては、根本的に相容れざるものがあるに拘らず、常に善隣の關係を持續しまして、且つ平和手段を以て案件の解決に努めて來たのであります」、特に滿洲國成立の後に於きましては、直接境を接する日、滿、「ソ」三國間の國交關係を調整すると云ふことが東亞平和の爲に極めて必要であると云ふ信念に基きまして帝國政府は常に是が爲努力を續けて居る次第であります、現に「ソ」聯邦側の宣傳に

09773

アジア歴史資料センター

09774

拘らず、我が日本軍は實際滿、「ソ」國境に於きまして、何等新なる軍事的施設をして居らないことは勿論、昨年六月以來北滿鐵道の讓渡交渉に付きましても、帝國政府が此の滿、「ソ」兩國の間に仲介斡旋の勞を執り來ましたことも、亦右方針を實行するの趣旨に外ならないのであります、事態斯の如くでありまして、「ソ」聯邦に於きましても、必ずや遠からず我が誠意を十分諒解するに至るべきことを確信して居るのであります」。

「次に帝國と北米合衆國との關係を觀察致しますのに、本來兩國の間には、根本的に解決困難なる問題は存在せずと言ひ得るのであります、抑、帝國が米國に對しまして常に衷心より善隣の關係を希望して居るのでありまして、進んで事を構へんとするが如きことのないのは勿論でありますが、同時に米國に於きましても、東亞に於ける帝國の地位を正當に諒解するに吝ならざることを信ずるのであります、唯滿洲事變發生以來、米國の對日輿論は一時惡化致しまして、爲に兩國民間に幾分感情の疎隔を生じたやうな觀

アジア歴史資料センター

を呈して居りましたが、固より帝國と致しましては、東亞百年の平和を樹立せんとする外に、何等他意ない次第でありますから、米國に於きましても此複雜にして特異なる東洋の事態を十分認識致しまして、我國が東亞平和の安定力であると云ふ所以を、諒解致しまして行きましたならば、全國間の感情の緊張と云ふものも自ら緩和せられるだらうと信じて居るのであります」。

「又帝國と英帝國との傳統的親交關係は、今日と雖も何等動搖致しませぬ、洋の東西に於きまして類似の地理的位置に在る此兩帝國が、世界各方面に於きましては互に其立場を理解し、協力を爲して行くと云ふことが世界平和の爲に貢獻する所以だと思つて居るのであります」。

「翻て輓近世界の狀勢を通觀致しますに、政治上の不安、經濟上の動搖、思想上の混亂等の爲に、國際關係は動もすれば平調を失はんとするの感がありまして、世界各國民間に相互信頼の念が薄くなつたやうに考へられますのは、洵に遺憾とする所であります、

0975

アジア歴史資料センター

9460

若し各國が互に其誠意を披瀝しまして、相互の立場を正解し、以て萬邦協和の大精神を發揮するに於きましては、如何なる問題に於きましても、其解決を計ることは必ずしも至難ではないやうに思ふのであります、要は各國が無用なる猜疑排他の風を改めまして、互に信頼協力の念を益々高くするに在りと信ずるのであります」。

「然るに通商貿易の方面に於きましては、之に對する障碍は何等緩和の跡を認めませぬ、却て增加するの傾向でありまして、曩に開かれました「ロンドン」經濟會議も、遂に其所期の成果を擧ぐることがなくして休會したやうな次第であります、而して近時我國の產業は著しく發達致しました結果、對外貿易も亦大に進展を見るに至りましたが、諸外國中には一般的通商制限の傾向と相俟つて、各種の障碍を設くるものが續出するやうな形勢でありますから、帝國政府は之に對しまして、鋭意機宜の對策を講じつゝある次第であります」。

「凡そ國勢の向上する場合には、其遭遇すべき事端と云ふものは多々あるものであり

アジア歴史資料センター

ますから、我が國民にして協力一致し、如何なる難局に遭遇しても、少しも動せざる覺悟と準備とを怠らざると同時に、冷靜に且つ著實に嚮ふ所正を履み行ふ所中を執り、以て事に當つて參りましたならば、帝國の將來に付きまして何等不安を感ずるの要がないのみならず、前途寔に洋々たるものであると思ふのであります」、(拍手)之を要しまするのに帝國は東亞に於ける平和維持の唯一の礎と致しまして、其全責任を荷ふものでありますから、吾人は一日も此意識を忘れてはならぬと思ふのであります」。

廣田外相議會演說反響

英國の部

一　ロンドンタイムス(一月二十三日)

「廣田外相は議會演說中に於て、蘇聯邦との良好なる關係の維持を希望し居る處、外相の言の如く、東支鐵道に關する滿蘇間の交涉が進捗すれば右は確に强めらるべく、又日米關係に關する言及は、曩に新大使の任命に依り印象付けられたる日本の太平洋對

8460

岸國との友誼關係保持の希望を裏書きするものなり。之と同時に、右演說拔萃を讀む英國人にして、其のデフエンシブ、キャラクター(防勢的特質)に感銘せしめられざるものなかるべし」。

二　マンチェスター・ガーディアン(一月二十三日)

「廣田外相は平和に對する希望を繰返し居る處、日本は依然惡口の目標とせられ居り、廣田氏が議會に對し鳩の如き言を爲し居る時、カガノヴイチは莫斯科に於て牛の如く咆哮し居れり東京が莫斯科の軍事的準備を重大視居るは當然なり。當分日本は蘇聯邦に向つて言葉の上に於て滿足を與へんとし居るものゝ如くなるが、實際行動こそ言葉の價値を示すと同時に、荒木將軍の辭職を意義あらしむるものなり」。

三　デーリー・ヘラルド(一月二十三日)

第一面に日本は全支那に對する權利を要求すとの大々的の見出を附し、廣田大臣は全支那が日本の勢力範圍なることを言外に要求し、全支那の安定は日本の國民的使命な

アジア歴史資料センター

りとし、右使命を果す爲英國より全幅の支持を受くることを希望し居れり云々の長文の記事を掲げ、更に論說欄に於て左の通り論評せり。

「日本の東亞に於ける大帝國主義計畫は今や明瞭となれり。廣田氏の演說は安定なる口實の下に、全支那を其の支配下に收めんとするものなる處、日本が獨力を以て廣大なる地域の政治的支配及經濟的開發を行はんとすることが、世界に及ぼす影響は玆に述ぶるの要無し。日本の帝國主義は自滅に終るべく、英國は斯かる計畫に協力を與ふるが如き事が問題外なることを東京に知らしめざるべからず」。

米國の部

一　經濟サン（一月二十四日）

「廣田外相の演說は米國に對して協調的にして、米國人の看過し得ざる所なり。支那問題に付ては、支那に統一政府の實現を見ざるは自ら治むる力無き爲にして、外國の對支援助は徒に支那の內爭を遲延せしむるに止まれり。斯く言へばとて、吾人は米

國は日本の滿洲に於ける行動を容認すべしと云ふにあらず。唯米國人の中には日本の滿洲に於ける行動を以て、日米の親善關係破棄の理由と爲し居る者ある事を指摘せんとす。蘇聯邦に對する外相の批評は峻烈にして、外交語としては甚だ挑戰的なり」。

二　ボストン・トランスクリプト（一月二十三日）

「外相の演說より觀るに、日本は滿洲國の設立に依り事實上其の欲するものを得たるを以て、差當り之が維持開發の爲平和を欲し居れりと解し得べく、此の解釋にして誤なくば、外相が蘇聯邦の惡宣傳を云々するは如才なき言ひ方なりや否や疑はしく、尠くとも友好關係を促進するものとは言へず、右日本の平和主義は、日本に戰爭の野心ありと信じ居るものには認められざるべきも、現在の處極東の情勢は協調主義が日本に取り最善の方策なる事を敎へ居れり」。

三　ブルックリン・デーリー・イーグル（一月二十四日）

アジア歴史資料センター

「日本が軍閥政治家の言に耳を傾けず、一層國際協調に留意するに至れる動機としては、日本に取りては聯盟をして滿洲國を平和國家とするが如き處理を認めしむる事有利なるが、之が爲には(イ)先づ米國をして滿洲國を承認せしむる事得策なるを以て米國との親善關係を必要とする事、(ロ)日蘇關係の緊張にも拘らず、日本としては尠くとも近き將來日蘇戰爭を避くるに努めざるべからざる事、(ハ)建艦競爭は結局英米に比較し日本に負擔重きを以て、日本として之を欲せざる事等を擧げ得べし」。

四　クリスチヤン・サイエンス・モニター(一月二十四日)

「滿洲事件中日本が不誠實なりし爲、不幸にして多數外國人は外相の平和的聲明を其の儘信せざるべく、廣田外相は日本が蘇聯邦に對し平和的意圖を有すと言ふも、世界は日蘇戰爭を云々する事を止めざるべし事實日本は滿洲に於て爲すべき幾多の平和的建設事業を有し居り、軍部と雖も右建設の爲平和的期間の必要なる事を認め居り、又蘇聯邦が頻りに戰爭を宣傳し居る事は、最近カガノヴイツチの演說に徵するも事實なる

0982

が唯日蘇親善を説く同外相の言を誰が信ずべきや。他國が日本を信ぜずとすれば、廣田外相の言にして眞なりとするも、蘇聯邦としては日本の尨大なる軍事豫算及將來に於て西比利亞攻擊を豫想する滿洲に於ける日本の行動に疑惑を抱くは至當と云ふべく、若しも日本にして西比利亞侵略の意圖を有せずとせば蘇聯邦側の不可侵協定提議を拒絶せるは失策と云ふべし」。

五　桑港クロニクル（一月二十四日）

「帝國議會に現はれたる戰爭に關する出版物取締の要求は、日本人大多數の平和的感情を反映するものにして、米國に於ても煽動的新聞紙が同樣自制せば幸なり。戰爭の危險は日米間に存せず、日蘇の關係こそ險惡なり。廣田外相の演說は米國に對して頗る友誼的なるが蘇聯邦に對しては全然異れる氣魄を示し、日本の蘇聯邦攻擊計畫に關する蘇聯邦の宣傳に抗議し、併も暗々裡に蘇聯邦の日本攻擊に關する日本側の宣傳を確認し居れり。戰爭は斯くの如く相互に恐怖心を刺戟し、互に自衛の觀念に追はれて攻

アジア歴史資料センター

擊を開始するに依りて起る。之れ識者が現今極東に事の起らざることを保障するに躊躇する所以なり。米國としては戰爭の勃發せざることを望み、假令戰爭起るも其の圏外に立たんことを欲する次第なるが、先づ戰爭勃發防止に努むるは圏外に立つよりも容易にして併も安全の策なり」。

六　羅府タイムス（二月二十四日）

「荒木陸相の辭職に加ふるに、廣田外相の議會演說は極東の事態に和やかなる空氣を與へたり。外相が米國との親善を熱望すと言明せるは、最近當地を騷がせたる少數日本侵略主義者の言動を全く相殺し、更に紛糾を作るべく大童に騷ぎ立て居る米國侵略主義者に對する回答をも與へ居るなり。米國民の壓倒的多數は侵略主義者にも非ず、又之に欺かるゝ馬鹿者にも非ず。太平洋に於ける米國の利益は、全然日本のそれと同樣平和を要求して已まざるなり。外相が滿洲事件に依りて生じたる日米兩國の感情的緊張は大に減退せりと云へるは、良く米國に於ける輿論を明察せるものと云ひて可

0983

アジア歴史資料センター

0984

なり。何となれば、米國人は滿洲問題に對し米國の參加せざるを以て滿足し居ればなり」。

七　華府スター（一月二十三日）

「同外相は其の中に於て、早晩米蘇兩國は極東の安定勢力たる日本の地位の結局彼等に利益なることを理解するに至るべきことを信ずと述べたるが、其の果して然りや否やは、唯將來の事實が之を證明すべし」。

八　ボルチモーア・イーヴニング・サン（一月二十三日）

「日本高官の口より鄭重なる對米親善の意思表示を聞かざること久しかりしに、今次廣田外相が熾烈なる親米感情を表現したるは、吾々の欣快とする所なり。併も右が米國の蘇聯邦承認に影響されたる結果なることに想到するとき、吾人の喜ばは更に大なるものあり」。

九　紐育タイムス（一月二十四日）

アジア歴史資料センター

「過去二年間の日本當局の發言中には、世界は日本を誤解すとの感が常に現はれ居たるが、今回の日本外相の演説中にも亦現はれ居れり。諸外國は東亞に於ける日本の利己的ならざる理想及目的を觀取するに妙に吝なるが、日本政府は大に平和の爲盡し居る積りにて今や蘇支兩國に對し福利を分たんことを提議す。廣田外相の言に依れば、日本は聯盟より脱退を餘儀なくせられたるも、之が爲却て同國と諸國との關係は密接の度を加へたりとのことなり。斯くて日本外務省は、其の政策を世界が正解せざるに憤慨を禁じ得ざるものなるに拘らず、何時か世界が日本の支那に於ける平和保持者たる地位を理解するに至らんことを殊勝にも希望し居れり。唯日本の斯かる態度に拘らず、支那が之に酬ゆる行動を取らざるを廣田外相は遺憾としたる後、蘇聯邦に對し一段と強き口調を以て、日本の平和的態度に酬ゆる所無きを指摘し、其の最近の態度を以て甚だ意外且つ遺憾なりと言明したり。莫斯科の連中は此の言を以て、威嚇と見るならんが、何れにせよ、一般は之を以て正しく日本が希望する極東平和に對する脅威

0985

アジア歴史資料センター

と看做すならん」。

一〇、紐育ヘラルド・トリビューン（一月二十四日）

「廣田外相の外交方針に關する言明中には、別にセンセイショナルな個所無し」。

「同外相の示せる政策は、確乎たる點あると共に協調的なる所あり。同外相は支、蘇、米、歐洲等各方面に向ひ、日本が亞細亞に於て武力に依り獲得せる地位は獨り日本の爲のみならず、諸國の爲にも利益なりと述べたるが、演說中のリベラルな點は、東亞に於ける日本の覇權を認めむ事を世界に促したる點に存す」。

一一、ボルチモーア・サン（一月二十四日）

「廣田外相は總ての國が日本の立場を諒解せむ事を欲するも、實際に諒解せむことを要することは、日本が所謂極東安定の保持者なる事、滿洲事件が日本の支持の下に爲されたる一獨立國民の行動に過ぎざる事、日本が聯盟を脱退したるは、聯盟が亞細亞の平和維持に關する基本原則を諒解せざる爲なる事之なり。如何に日本と其の隣國とが

アジア歴史資料センター

二府理解し合はん事を希望すと雖も、現實の事態を全く無視しては到底多々を期待し得ざる次第なり」。

「日本の國家主義は常軌を逸し、又其の上海、滿洲に於ける侵略行爲は、列國共同して平和を維持するの望を失はしめたりと雖も、同國の病氣は又世界大多數の國の罹れる病氣と軌を一にするものなるに鑑み、此の際御互に罪を鳴らし合ふよりは、敢然立つて現下の忌はしき氣運に挑戰し、其の恐るべき結果に對し一段の注意を喚起する方有效ならん」。

一二　實府レコード（一月二十四日）

「親米的態度を表明せる廣田外相の議會演說と荒木陸相の辭職とは、日本の外交方針轉換の契機にして、二荒伯の爲したる議會質問と共に、日本自由主義の發言權恢復を意味する重要事件なり」。

一三　實府パブリック・レッチャー（一月二十四日）

アジア歴史資料センター

8860

「廣田外相は言ふ、「日米間に本質的に解決困難なる問題無し」と、此の言辭は日米兩國間に現存する誤解、及衝突の原因の再檢討を要望するものなり、惟ふに此の際再檢討を要する主要問題三あり排日問題、海軍軍縮問題及滿洲問題なり。而して此等問題に關し實際的諒解に達すべく幾多の障碍横はり、兩國間に「本質的に解決困難なる問題無し」との見解に必ずしも同意し得ざるも、平和の基礎發見の爲、日米兩國民は萬難を排し荊莉の道を進まざるべからず、今回日本が示したる友好と情誼のゼスチュアに對し、米國は此の精神を以て酬ひざるべからず、要するに、日本のゼスチュアは日米間に恬淡且熱氣ある討議を行ふべき機會を與へたるものにして、吾人は之に對し眞摯なる氣持を以て歡迎の意を表すべし」。

一四　市俄古トリビユーン（一月二十五日）

「廣田外相が議會に於て日米間には憂慮すべき問題無しと言へる言葉は、其の儘之を受入るゝに足る理由あり。勿論米國人は極東に關し日本人と全然同一見解を取る事は不

アジア歴史資料センター

可能なるも左れば之で日本人を滿洲より追出し、又は支那國境を保護する爲戰を挑む考へ無し」。

一五　市俄古デーリー・ニュース（一月二十五日）

「日本の輿論は重大なる變化を來せりと傳へられ、外國との親善論者政府を支配するに至れりと信ぜらる然れども日本が餅を收めたるを以て萬事可なりと安心する能はず。國粹團體が再び日本を支配する可能性は常に存在するを以て、他國は日本の穩健分子を强力ならしむる爲、出來得る限り盡力す可きなり。日本人に割當を適用するが如きも、米國としての賢明なる一商見なる可く、英、米、日三國間の協同通商協定は、一層平和の保障となる可し、同時に極東の事態は平和維持の見地よりすれば、未だ缺くる所多く、之が親善關係を恢復する爲には、友誼的言辭以上のものを必要とす」。

獨逸の部

一　フランクフルテル・ツアイツング（一月二十四日）

アジア歴史資料センター

「荒木陸相の辭職及廣田外相の平和演說は、東京に於て從來の政策に再吟味が行はれんとする徵候と見ることを得べし。廣田外相の就任に依り穩和派は强き支援を得たる處、同外相が軍事大豫算に反對せるは、滿洲及其の隣接地域に對する軍事的權力の把握を批議せるには非ずして、既得の地位を永久に確立せんとする考慮に出てたり。同外相は國際聯盟脫退後に於ける日本の孤立の危險を認むると共に、經驗に富む外交家として假令日本の財力は戰爭に耐ゆべしとするも、極度に力を擴張すべからざるを知れり。荒木陸相は蘇聯邦との軍事的紛爭を欲せざりしとはするも、尙之を辭せざりしに反し、廣田外相は斯かる紛爭よりして西比利亞遠征に至らしむべからずとの意見なり。同外相の根本思想は財政の恢復を計ると共に、全力を世界市場の鬪爭に注がんが爲、大陸に於ける既得の地位を固定せんとするに在り。同外相は、日本政府は東亞の平和維持に對し大なる責任を負ふものなることを述べたるが、此の責任の自覺は極東の平和は今日日本の此の上の軍事的遠征に依りてのみ危殆ならしめ得べきものな

アジア歴史資料センター

るを知れるが爲なり。蓋し支那は其の內部的問題の爲に、又蘇聯邦は何よりも平和を必要とする事情の爲に問題外なればなり。同外相の蘇聯邦に關する言明は、最近莫斯科に於て挑發的演說が爲されたる後なる丈けに、一層大なる意義を有す。而して同外相の蘇聯邦に對する提言は、蘇聯邦として之を看過し得ざるべき處、右提言は東亞に於ける新事態の承認を前提とするは勿論なり。廣田外相は蘇聯邦、支那、米國及英國以外に言及し居らざる處、世界の政局は同外相の眼に危險無きものとして映せず、同外相は「吾人は東亞に於ける平和の基礎にして、從て總ての責任は一に吾人の双肩に懸れり」と述べたるが、斯の如き政治家的言辭は、吾人の久しく聞くを得ざりし所なり。右は軍事的增進に力が向けられ居る國內に對するものなるは勿論なるも、又政治家が他國の責任を云々し、且自己の責任を會議に依て覆はんとしつゝある外國、殊に歐洲にも向けられたるものと謂ふを得可し」。

二　ケルニツシエ・ツアイツング（一月二十四日）

アジア歴史資料センター

「廣田外相の演說は平和的意思を表示せるも、之と殆んど時を同ふして、莫斯科に於てはカガノウイッチは其の演說に於て極東の事態の緊張を云々したり。此の兩演說の矛盾は兩國の策略の相異に依れり。日本は最も抵抗少き線に沿ひ、大國との紛議を避けつゝ亞細亞大陸に於ける利益範圍を著々擴張せんとするものなるを以て、廣田外相の如く述ぶる外無し。日本は平和を欲し居るは勿論なるも、所謂國民的使命を云々し居り、右は要するに亞細亞の半分を意味するに外ならず、日本は蘇聯邦の國境に對する軍事的準備を否定せりと雖も、斯の如きは蘇聯邦を安心せしむること難かる可し。蓋し蘇聯邦は、日本の占領地域內に於ける軍事力を知り居ればなり。而して一方蘇聯邦は、日本を平和の破壞者として世界輿論を動員すると共に、自國國民に國防の必要を高唱せんとしつゝあるものなる處、近來蘇聯邦が攻勢に出て來り居るは事實なり。

廣田外相の平和意思の確言は大なる範圍に於て眞實と認め得るも、日本は膨脹政策を

アジア歴史資料センター

放棄し得ざるべきは確かなり。然れども日本は蘇聯邦との紛議を避くると共に、東支鐵道及蒙古に於ける勢力範圍の問題等に付友好的合意に努むべし。而して日本は蘇聯邦の強大は支那の態度に影響することを考量せざるを得ざるべく、之れ日本が南京に對し妥協的意志を示せる所以なり」。

三　ベルリナー・ベルゼン・ツアイツング（一月二十三日）

「廣田外相の演說は大なる政治家の勝れたる演說として、世界輿論に大なる反響を見るべし、右演說は支那の事態及蘇聯邦との關係に重要性を置ける處、同外相が北支の平和及秩序の維持は日本に取り極めて重要なること、及日本は支那に於ける共產黨の活動に大なる注意を拂ふものなることを述べたるは、日本は必要の場合干涉することあるべきを示せるに外ならず。而して同外相の演說は、日蘇關係が蘇聯邦の滿洲國に對する態度に依りて定めらるべきことを示せり」。

四　フォッシエ・ツアイツング（一月二十四日）

0993

アジア歷史資料センター

0994

「廣田外相の演說は日本の政策の妥協的傾向を示すものと謂ふべく、蘇聯邦及米國に對し或種の和協的意思が現はれ居れり」。

五　デル・ドイッチエ（一月二十四日）

「廣田外相の演說は、極東の事態が益〻緊張せんとしつゝあるに當り、殊に注意に値する處、右演說は對蘇關係を改善せんとする努力を示せり。然れ共極東の事態が緩和せしめられ得可きや否やは疑問なり」。

六　ゲルマニア（一月二十六日）

「日本の政策の目標は、日本の指導の下に日本、支那及東部西比利亞にアングロサクソンの資本より解放せられ、且ボルシエヴイズムの危險無き經濟區域を建設せんとするに在り。日本の蘇聯邦との戰爭は、支那に於ける日本の地位を決定すべく、又日本の米國及英國との開戰は、日本が南米、濠洲又は印度洋に沿ふて西方に進出する通路を終局的に保障せらるゝや、又は閉さるゝやの運命を決定するものなるに鑑み、日本

アジア歴史資料センター

は差當り全力を東亞に集中し、將來の決定的闘爭に備へんとするものなるべし」。

「今日支那の青年知識階級の大部分は汎亞細亞主義を持し、日本との協力即ち黄色人種の精神的及政治的合同に努力し、ボルシエヴイズム及アングロサクソンの勢力と闘ひつゝあり。莫斯科は既に支那に於て大部分其の勢力を失へる處、他面ヒットラーの國粋社會主義は、中央歐羅巴のボルシエヴイズムを打破せるのみならず、ボルシエヴイズムの計畫は西班牙に於ても失敗したり。日本のボルシエヴイズムに對する勝利は、其の世界革命の終局を意味すべし。然れ共、多數ブルジョア政黨に指導せられ、且工業化せられ居る日本としては、同國のみにて永くボルシエヴイズムに對する闘爭に堪え得ざるべく、而して一方支那は、强き政府の下に國民的自覺に覺醒せる若き國としてのみボルシエヴイズムを防止することを得べし」。

佛國の部

一　デバ（ラシヤン）論說（一月二十三日）

アジア歴史資料センター

9660

「國際輿論は、荒木陸相を以て日本の滿洲政策の責任者と看做し、遠からず其の獨裁政治を見るべしと思惟し居りたる爲、同氏の辭職は驚異の眼を以て迎へられたるが、日本の軍國的政治は單に陸軍の意思に止らず、日本民衆の渴望を反映せる更に深き根據を有するものなるを以て、日本の政策は之に依り變化を見ざるべし」。

「廣田外相は其の支那、蘇聯邦、米國及英國に對する態度を明にしたる後、日本の對外關係に於て重大問題尠からざるは蔽ふべからざる所なるも、日本は東洋平和の基礎にして、日本が獨自の責任を有することを忘るべからず。とて、日本獨自の責任の始まる所は、即ち國際公道の停止する所なるを率直に述べたり。又同外相が、日本は東洋に於て英國の西洋に於て演じ居る役割を演ずるものなりと爲せるは、海軍々備に關し英米と對等比率を要求する伏線なるべきが、吾人は日本の行動を是認せざるを得ざるも、同外相の明白なる聲明を輕視するを得ず」。

二　エコー・ド・パリー（ベルチナクス論說）（一月二十四日）

アジア歴史資料センター

「日本が日支事件の混沌たる事態に在りしとき、其の政治に新なる傾向を與へたるは、兎に角荒木陸相なり。然し日本の危機も今や峠を越し、滿洲國は健全なる發達を遂げ、日本品は海外に進出し、日支關係を好轉しつゝあり。廣田外相は今回の演說にて、日本の發展策が第一に衝突を來し得べき蘇、英、米三國との關係を固めんと欲するものなるを明かにせり。滿洲國の出現は同地域に於ける蘇聯邦勢力を失墜せしめ、夫れだけ日蘇間の紛議は激しき次第なるが、之が解決は英米兩國に依る所多かるべし」。

三　タン（一月二十六日）

「荒木陸相の辭職及廣田外相の巧なる演說に依り、日本の政策に變更を見るべしと想像する向あるも、右は皮相の觀察に過ぎず。廣田外相の演說は、要するに日本は玆數年間實行し來れる政策を維持し、極東平和の主導者たる位置を固持する事を明かにし居れり。乍併、穩健協調的の口調は注意に値す。米國の蘇聯邦承認及蘇聯邦が滿洲國國

アジア歴史資料センター

境に兵力を集中したる事實は、日本に對し一種の反響を與へたるものゝ如く、日蘇間紛議勃發の危險は半年前より減じたりと觀らる。要するに、日蘇兩國は今や形勢の推移を見送れる形にして殊に何事も忽にせざる日本は愼重なる長期計畫を抱き、現在の處滿洲に於て得たる結果を固むるに熱心なり。併し國際政局は變化すべく、時は果して日本に味方すべきや、蘇聯邦に味方すべきや何人も豫見し得ず」。

小國の部

一　白耳義

「ガゼット」

白國主要新聞は何れも二十三日又は二十四日外務大臣演說の要領を掲載し、大多數は重要點を漏れ無く掲げ居るも、批判を加へたるもの殆ど無く、唯ガゼット（中立）のみは特に詳論を掲げ大に贊意を表したる後左の通り論評せり。

「聯盟脫退に關する廣田外相の言は、聯盟擁護者には眞に手痛き敎訓なると共に、

アジア歴史資料センター

ヒットラーには有利の資料となるべし」。

二 和蘭

一 Handelsblad（一月二十三日）

廣田外相の演說は、日本は東洋の平和を維持するの大使命と責任とを有するものなることを、世界に知らしめたるものなり。外相は就任當初、難局の打開は外交手段に依るべきを力說したるが、今回の演說は外相の政策を更に强調したるものと云ふべく、日本の軍閥に對する各國の警戒益、嚴なるに鑑み、日本政府は荒木政策よりも廣田政策に據るに如かずと爲すものゝ如くなり。外相の對米政策は平和主義に基調を置くものなるが、理論と實際とが一致するを得ば、太平洋の重苦しき空氣は緩和せらるべし」。

二 Nieuwe Rotterdamsche Courant（一月二十三日）

外相演說の前段は平和的に響くも、後半は衝突の可能性を暗示するものなり。特に

アジア歴史資料センター

支那に對する言辭は高壓的であり、又蘇聯邦に對する措辭も表面は平和的なるが內に脅威を藏す日本は滿洲國の建設を以て其の目的を達せりと稱するも、果して之を以て滿足するや、否や。滿洲國の政權にして他日北支那全般に亙り擴大せられんか、日本は果して之を默視するや否や。外相演說の結論は、日本外交政策の要求する所は正當にして合理的なる日本國民の要求なり。故に之の點に付各國の考慮を促すとの意味に盡く。斯かる言辭が荒木陸相に非ずして、現政府の穩和派の中堅たる外相より聞くことを遺憾とするものなり」。

三　チエツク「ブラーゲル、ターゲブラット」

「日本は今や其の財政的及內政的原因に依り、以前の平和的協調政策に復歸したり。本演說が極東に於ける戰爭の危機を弛緩せしめたるは、歐洲に好影響を與へたり。日本が其の軍國的政策より離れんとしつゝあるは、他國の軍擴を刺戟せざるに至り、從て世界不況の緩和に貢獻する所ある可し」。

1000

アジア歷史資料センター

四　佛領印度支那

一　アンバルシアル

「語調協調的なるも、東亞に於ける日本の使命を論ずる邊りは、日本が既得利權を確保するの意思固さを看取し得べく、未だ支配意識を拋棄せず」。

二　デベーシュ

「日本の商權擴張に危機の存するあり。新嘉坡に於ける英國の海軍會議、莫斯科の猛烈なる宣言も亦、自ら之を理解するを得ん」。

五　濠洲

一　シドニー・モーニング・ヘラルド

「外相の演說は東亞に於ける日本の權益の强調、其の責任、進路の確定並遂行及國際協調に依る平和維持等を趣旨とするものなり」と前提し。

イ　滿洲國發展の事實を肯定し、リットン報告の認むるが如く、同國が日本の生

アジア歴史資料センター

命線にして、日本は絶對に滿洲より手を退かざるべく。

ロ　目下日本の滿洲に於ける地位を脅すは蘇聯邦のみなること（目下蘇聯邦側にて滿洲方面向け鐵道の建設を急きつゝありとの報道にレフアーし不吉の兆と爲したり）。

ハ　支那の共產化、蘇聯邦の東漸政策より見て、過去二、三年の紛亂は未だ序幕に過ざるべきこと。

を述べたる上、米國の巴奈馬獨立援助はワシントン政策の不可缺のものたりしにあらずやと反問し、暗に我對滿政策を是認する態度を仄かせり。

二　サ　ン

「日本外相は東亞に於ける日本の强固なる政策目的を極めて温和なる調子と威嚴とを以て宣言せり」と爲し、「主として滿洲國の嚴存に重點を置き、同國が愈〻秩序ある國家を形成しつゝあるに對し、支那の混亂及共產化の事實を指摘し、更に北支混亂

アジア歴史資料センター

の兆あるに於ては、日本をして新たなる政權の樹立を其の重大なる義務と考へしむる無さを保せず。結局外相の演說はパン・アジアテイツグの保持が日本のみの特權なりと爲すにはあらざるも、併も東亞に於ける日本の存在の所以を强調する政策及其の權力の强さ宣言に外ならず」と結べり。

六　加奈陀

モントリオール・スター（二月二十三日）

「列國が日本の極東政策に深刻なる不安を有するの事實は、近時愈、明瞭なり。米國は大海軍計畫を有し、英國亦新嘉坡の防備を急速決行の模樣あり。過去數日來米、佛、蘇當局が、日本に關し公表せる言說の大膽無遠慮なる事近年稀に見る所なり。此等列國の態度が日本を憂慮せしめつゝあるは當然とすべし」。

七　希臘

一　Proia

1003

アジア歴史資料センター

「日本の海軍擴張及其の市場侵略は、米國をして進んで蘇聯邦と提携せしめたり。日本の、エチオピアに於ける農事植民は伊太利を憂慮せしめ、日本の輕工業は英、佛をして國内市場をさへ失はしめたり。日本外相の演說が、猜疑心を以て聞かるゝ所以茲に存す」。

「日本の政治工作が支那に止まりし間は聯盟脱退にて事濟みたるも、其の東支鐵道に觸るゝに及び米蘇提携成り、今や太平洋を包む戰雲は歐洲にも波及せんとす、日本外相の演說は言葉は平和主義なるも、擴がり行く危險を暗示す」。

二、Estis

日本が滿洲に實力を行使し、國際約定に違反せるは萬國の自由主義者を失望せしめしも、其の結果の良好なるは之を認めざるを得ず。廣田外相の侵略せず、武力を用ひず、專ら國際的了解を遂げんと欲するの聲明は、極東に異狀有りとの宣傳を打消すに足る」。

アジア歴史資料センター

一　天津漢字紙

議會に於ける外務大臣演說の全文を「律に掲載せしが、各新聞共其の前段に、倫敦新聞が「日本は東亞に一大帝國を建設せんとしつゝあるは、既に釋明の餘地なき今日、廣田外相の演說は世界に向つて日本は東亞和平に藉口して支那を抑制せんとする野心あるを宣言するに等しく、日本の右野心は之を實行に移す時は即ち日本自身の滅亡なり」と論せる趣の一月二十三日ルーター電報を大々的に掲載し居れり。

二　益世報（一月二十四日）

「其の日支問題に關する點に於て、之を一年前の內田伯の演說に比しては儀禮を盡せる穩當なるものなるが、內田伯當時、滿洲恢復を熱望せる支那に對し脅喝の辭を以て臨める態度は、今日之を必要とせざるに至りし爲なるべく、併も日本は北支治安に對し特に關心を有すと言へるは、尙暗に威嚇を含むものとも解せられ、更に對蘇關係に付

アジア歴史資料センター

ては最も重心を置けるが如く、只管蘇聯邦の諒解を求めんとしつゝある言辭は、今日の日蘇關係に於て當然と云ふべく、又英米に對しても努めて親善を說き、全般を通じ國際間の對日空氣緩和に努め居る跡明かなるが、右演說に現はれし對蘇方針の爲、日蘇開戰の時期延引さるゝものとせば、其の間に於て今日國際變局に乘じて何等爲す力なき支那は、大に自力を養ひ得るものと云ふべし」。

陸相更迭反響

支那

一、世界日報（一月二十三日）

「日本の對外政策は强硬より比較的協調となり、武力的より比較的和平的とならんも、何れにせよ一時の策略的變更に過ぎず。故に支那侵略の原則は毫も變更せらるゝものに非ず」。

二、天津商報（一月三十四日）

アジア歴史資料センター

「滿洲事件以來の日本の對支侵略政策は荒木陸相の主持する所なるが、日本が複雜せる國難に處し、活路を歐米先進國に求めずして之を支那に求めんとするは、日本の傳統不變の政策なるを以て、陸相更迭に依り其の侵略政策緩和せらるゝものと觀るべからず。一方支那の現狀は同黨異伐を事として統一せる國策無し。之を人に依り輕々しく國策を改めざる日本に比しては、自ら優勝劣敗の感無き能はず」。

三　北平晨報（一月二十四日）

「今や日本の對外目標は老體衰弱の中國にあらずして、對米蘇兩國政策の確立に腐心中なるも、對支政策の如く武力壓迫、外交威嚇等に依る强硬政策の遂行不可能なり、吾人の觀察に依れば、今後日本の國策は米蘇兩國に對しては勿論、支那に對しても從來の壓迫威嚇政策を緩和し、外交工作に依りて世界輿論の緩和並に一九三六年の難關突破に努力するものなるべし」。

滿洲國帝制實施に就て

アジア歴史資料センター

一　英國

1　ポスト紙（三月一日）

滿洲國發展の事實を述べ、英國代表が即位式に參列せざるを遺憾となし、「聯盟の決議の如きは既に過去の歴史に屬す。蘇國の血腥き革命さへも容認せる列國が此の溫和なる復辟に伴へる些少の非違を排擊し滿洲國を承認し得ざる理由なし若し米國に於ける承認論擡頭の報道にして眞ならば英國の政策變更上好都合」と論ず。

2　テレグラフ紙（三月一日）

「英國政府は未だ滿洲國を承認するに至らざるも、英國人にして新皇帝の萬歲を願はざる程頑迷の者無かるべし。即位の歴史的意義は滿洲國が完全に支那より分離せることに存す」。

「滿洲國は依然として日本に指導せらるべきも、日本は北支に對し野心を有せず、寧ろ蘇國に先んじて蒙古を其の勢力範圍に入れんと欲しあるのみ」。

アジア歴史資料センター

3　ロンドンタイムス(三月二日)

「滿洲の舊軍閥は通貨を紊亂して人民の怨府となりたるが、新政府は此の點の改革に付功績顯著なるのみならず、匪賊の害を除き交通機關を改善し、新京に於ける陋屋は美麗なる建物に代へられつゝあり。滿洲の荒地を征服せる日本の忍耐と組織力とは之を稱讃せざるを得ず」。

「新國家は明かに日本の支配下に立つべしと雖、其の存在は多分日本の併合を防止するに役立つべし」。

4　メール紙(三月一日)

リットン調査團兵器輸出禁止等日英關係を惡化せしめたる外相サイモンの國際主義外交の失敗を猛擊しあり。

5　其他各紙

單に記事を掲げたるのみ。

アジア歴史資料センター

二　米國

1　シカゴ、ジアーナル・オブ・コムマース(三月二日)

「溥儀氏の即位は假令日本の傀儡たりとも新政府の確立を示すものなり。スチムソン主義成立後、佛國は對滿借款を申込み、英國もス府の現狀と極東に於ける日英の密接なる利害に鑑みスチムソン主義を餘り歡迎せざるべく、獨逸も日本に同情すべく、殊に明年は各國共比率決定に重大利害を有する海軍會議あり。果してルーズヴエルト大統領はスチムソン主義を踏襲するか、將又滿洲國承認に至り得る政治家的方式を發表すべきか愼重顧慮すべき問題なり」。

2　ニューヨーク、Abbot(クリスチヤン・サイエンス・モニター)(二月二十八日)

「露國不承認の理由が今尙存するにも拘はらず、最近米國が露國を承認せる事實は、米國が滿洲國に對しても、時に寛容の態度を採り得べきを暗示するものなり。事實ルーズヴエルト政府は前政府の政策に餘り同情を有し居らず」。

アジア歴史資料センター

3　ボストン・イーブニング・トランスクリプト（二月二十七日）

「滿洲國が永續すれば、諸國は漸次之と外交關係に入らざるを得ざるに至るべし」。

4　デーリー・ニュース（三月二日）

「ルーズヴェルト政府は前政府の政策を繼へして蘇聯邦を承認せり。然らば何故滿洲國をも承認して日米間の不安を除き滿洲國の經濟開發に參加せざるや」。

三　佛　國

1　巴里ジュールナル（三月二日）

「支那の國民運動者が行き過ぎたる爲め日本人は我慢し切れず滿洲國を作り、新國家の首長として溥儀執政を迎へたるが、二年間の經驗成功したる爲め其の登極を見ること、なれり」。

2　巴里ル・ジュール（三月二日）

「斯かる帝國の建設が日本の爲得策なりや。將來支那人たる滿洲國民が溥儀を中心と

アジア歴史資料センター

して日本に對するブロックを形成するの惧なきや」。

四　アルゼンチン國

1　Couttier Delaplata（二月二十七日）

「滿洲國は帝制樹立に依り日本の極東政策と緊密なる關係を結ぶに至つた。世界に孤立せる滿洲國は茲に背水の陣を布いたと云ふべく、日露開戰の曉に最先に砲火の洗禮を受くるのも覺悟の前だらう」。

2　スタンダード紙（三月一日）

「帝政の樹立は日本が完全に極東を支配することを意味する。露西亞は是より東方への進出を阻まれてしまつた。日本が滿洲を併呑するであらうと云ふ米國の懸念も消へ失せ動搖せる東洋に安定の外觀が現はれた。支那は國都に接近する地方すらも治安を維持することが出來ない有樣だから、外藩の分離には抗議の餘地もあるまい。多分日本は過剩人口の捌場を新に求むることもあるまいし、日露戰爭避け難しとす

アジア歴史資料センター

る勞農の恐怖も治まることだらう」。

五　ポーランド國

駐日ポーランド公使ミチエル・モスシキー氏新京に於て語る（三月四日）

「余は滿洲國を承認しやうとする本國政府の意を體し視察の爲め滿洲に來たものである、ドイツ政府は既にクノール商務官を派遣し滿洲國承認の意思あることを示して居るがポーランド政府もドイツ政府に先んじ滿洲を承認しやうとする意向を持つて居る、歸任後直に本國政府と打合せた上、聯盟との關係はあるが出來るだけ速に滿洲國の承認を實現したい。滿洲國の帝制實施に就ては余は滿腔の祝意を表して止まない」。

求め難き世界の平和

英國の宗教家ソールウード博士は新聞記者を業とする其の子息と共に第二回世界漫遊の途上、二月八日天津に於て首題の如き興味ある講演を爲し聽衆に多大の感動を與へた。其の要點拔萃左の通り

アジア歴史資料センター

「余は基督教を信じ宣教を以て職とし世界の平和招來を以て其の使命と考へ居れり。然れども基督教の信條を世に實行せんとするには幾多の支障ある事を自ら體驗せり」。

「余は一介の宗教家なり。然れども一旦緩急あれば祖國の爲めに一身を犧牲となすの力を有せり。徒らに他人に賴り他國に憐みを請ふが如きは基督教徒として恥づべき行爲なり。」(暗に支那及支那人を指せり)

惟ふに世界の現狀は各國相互間の不信に基因するもの多し」。

「余等親子の者は上海及南京方面に於て支那要路の人々とも會見せり。然るに彼等の多くは現在の時局に對して殆んど何等の定見もなく、又確固たる方策もなく、徒らに其の無力無援を告白するのみ。今や支那の狀態を見るに、國家不統一の結果は此處彼處に內亂發生して收まる所を知らず。唯國民のみは殆んど政治に沒交渉にして何人が政權を握るも敢て意に介せざるが如し。換言すれば支那が破壞に破壞を重ねつゝある間に、隣國日本は只管建設的事業を急ぎつゝあり、之れ大なる兩國の相違なり。一は大國にして力

アジア歴史資料センター

弱く、他は小國にして力大なり。而して此の兩國常に相反し、其の結果は世界の危機を胚胎せんとす」。

「ゼネバに國際聯盟開かれて以來、同聯盟當局は多くの重大なる國際紛糾事件を取扱ひながらも充分滿足なる解決をなし得ざること多し。之れ聯盟に力なきが故なり。故に現在の國際聯盟をして世界の平和を招來せしむることは到底望み難き所なり。軍備擴張可なるべし。軍備縮少更に可なり。要するに各國互に相手方を信せず、唯嫉妬と偏見とを以て之れに對する限り、如何なる方法を用ふるとも、國際的親交を促進すること難し。而して此の間に處し唯力と正義とを有する國のみが終局の勝利を見るべきなり」。

（終）

1015

アジア歴史資料センター